

認知症本人大使「希望大使」の任命について

令和元年6月に政府においてとりまとめられた「認知症施策推進大綱」において、「認知症本人大使（希望宣言大使（仮称））」の創設を明記し、認知症の人本人からの発信の機会が増えるよう、地域で暮らす本人とともに普及啓発に取り組んできたところ。

令和6年1月に施行された「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」においても、共生社会の実現を推進するために必要な認知症に関する正しい知識及び認知症の人に関する正しい理解を深めることができるよう、認知症の人に関する国民の理解の増進等に関する施策を講ずるものとされていることも踏まえ、年代、性別のほか地域性も考慮して、以下の7名を「希望大使」として任命（※）

※令和6年1月20日を以て任期が満了することに伴う再任（5名）及び令和6年1月21日付け新規任命（2名）。

藤田 和子（ふじた かずこ）

鳥取県鳥取市在住、58歳。
看護師として働いていた45歳の時、若年性アルツハイマー病と診断される。現在、一般社団法人 日本認知症本人ワーキンググループ代表理事。



「認知症になっても自分らしく暮らせる地域にしたい、そんな地域をつくりたい」と考え、12年前から地元で活動を続けてきた。これからもその活動の輪を広げていくために、全国各地で「認知症とともに生きる希望宣言」を伝え、その地域の本人たちが前向きに生き、仲間をつくり、社会に参加していくことの後押しをしていきたいと考えている。

柿下 秋男（かきした あきお）

東京都品川区在住、66歳。
大学（東京教育大学（現筑波大学））在学中、モントリオールオリンピックに出場。青果社在職中にMCIの診断受け、1年半後62歳で退職。現在、初期の認知症。



筋トレ・芸術療法・音楽療法・認知トレーニングなどのリハビリ、清掃活動・地域見守り活動など社会貢献活動、就労訓練（菓子の製造、花壇の整備、新聞の戸別配布など）を行っている。地域の認知症関連の講座等では講師役も。「認知症であってもなくても暮らしやすい社会を地域の人たちと作る活動」や、東京オリンピック・パラリンピックに向けて、スポーツでつながる活動もすすめていきたいと考えている。

名称

「希望大使」

用務内容

- 認知症理解のための普及啓発に関する業務として、以下の用務を想定
- ① 国が行う認知症の普及啓発活動への参加・協力
- ② 国際的な会合への参加・希望宣言の紹介等
- ③ その他
- ※ なお、具体的な用務については、任命した希望大使と厚生労働省と相談のうえ、検討するものとする。

任期

- 任命日より2年間
（任期途中の退任及び任期満了後の再任は妨げない）

任命時期

令和6年1月21日（日） ※前回任命日：令和4年1月21日（金）

丹野 智文（たんの ともふみ）

宮城県仙台市在住、45歳。
自動車販売会社でセールスマンとして活躍していた39歳の時、若年性アルツハイマー型認知症と診断される。



2015年から、認知症の本人が自身の体験や経験をもとに、当事者の相談を受ける「おれんじドア」を地元の仲間とやっている。国内だけでなく、国際アルツハイマー病協会（ADI）国際会議等にも積極的に参加。「できることを奪わないで欲しい」と、「本人だからできることがある」とことを社会に発信している。

春原 治子（すのはら はるこ）

長野県上田市在住、76歳。
教職を定年退職後、小学校の授業支援や地域初の放課後児童広場を立ち上げる。認知症診断後も特養ボランティアや地域活動を継続。



認知症であることを公表し、当事者として、月2回、本人や家族、近隣住民等の相談にのっている。「本人の言葉（家族の困りごとの相談を受けて）」
「私の体験からの話は、人間は一人ひとり皆違うので、当てはまらない場合もあるかもしれないが、小さなことでも、本人にとっては、本当に大切なことだと思えます。物忘れが始まって自信がなくなっているのに、できることや大切にしていたものを奪われると切ないと思いますよ」

渡邊 康平（わたなべ やすひら）

香川県観音寺市在住 77歳。
日本電信電話公社（現NTT）の機械課職員、50歳から観音寺市民主商工会に勤務。72歳で脳血管性認知症と診断される。



2017年6月から三豊市立西香川病院の非常勤相談員として勤務。院内の認知症カフェ（オレンジカフェ）に通う当事者の認知症を抱えながら生きる不安や悩みを聞き、自分らしく生きる姿をみせながら、認知症になってもよりよく生きるための支援をしている。地域や県外で認知症に対する社会啓発のための講演等、積極的に活動している。



※年齢・診断名は、任命時点

新規任命

鈴木 貴美江（すずき きみえ）

京都府在住、84歳。
1969年頃から夫が立ち上げた呉服工場の経理を担当。義母が認知症を発症、夫も二度の脳梗塞後遺症で高次脳機能障害を発症し、2人の介護を長女と共に担った。義母、夫を看取った後、75歳で軽度認知症（シンギン顆粒性認知症）と診断される。2022年から、京都府認知症応援大使。



診断後、引きこもりがちになったが、主治医より認知症カフェの手伝いを勧められ、京都・岩倉地域での農作業・マルシェなどに参加、現在の活動につながった。・オレンジカフェやワークショップの集まりでは、コーヒーを注いだり、カップを洗ったりの水回りを担当。認知症サポーター養成講座での発信も行っている。・自転車に乗ることを目標に、練習した初日にこれを達成。その後、ボーリングなど、楽しみながら、次々とチャレンジしている。・誰かのお役に立つ事が私の元気の源になっています。周りのみなさんに支えて頂き今とても幸せで、感謝の気持ちで一掃です」

新規任命

戸上 守（とうえ まもる）

大分県在住、63歳。
38年間、地方公務員の仕事をしていたが、56歳頃からの忘れの症状と体調不良があり、前頭側頭型認知症と診断される。その後、退職。2021年から、大分県希望大使。



診断後は落ち込み、ひきこもったが、大分市で若年性認知症の人たち一人ひとりが力を活かしながら楽しく活躍する大分市のデイサービスにつながったことで「自分を取り戻す」。
現在もデイサービスに通いながら、同社が立ち上げた事業所で運輸関係の仕事にも従事。
「もともとは話し下手だったが「一人でも元気になる人が増えてほしい」「認知症があっても同じ社会の一員としてともに暮らせる地域をつくらせたい」と県内外で自分の体験と日々の活動を発信。大分県の認知症のピアサポート事業の相談員として、県内の全市町村に出向いて仲間を勇気づけている。

認知症の人本人が自らの言葉で語り、認知症になっても希望を持って前を向いて暮らすことができている姿等を積極的に発信